
エモーション

創離

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エモーション

【Nコード】

N2830Y

【作者名】

創離

【あらすじ】

表舞台には出せないモノ、それは確実に世の中に存在している。それを時には秘密裏に、時には大体的に処理する政府公認の私設団が存在した。

萃と水稀はその特殊工作員であり……

萃と水稀（前書き）

久しぶりの投稿での連載小説です

萃と水稀

「そうなの？ 樹「いつき」、でもそれって危くない？」

「大丈夫だよ、水稀「みなぎ」も絶対気に入るよ」

萃「すい」は自分の後ろの席の会話に耳を傾ける。

後ろでは女子が4人で放課後の会話を楽しんでいた。

「さて、終わった」

萃は日誌を閉じ、筆記具を鞆にしまいこむ。

「俺はこれで帰るけど、まだ残るんなら戸締りは頼んでいい？」

「おっけー。じゃあね、委員長」

女子の中の一人が萃にそう報告する。

「それじゃ、また明日。萃君」

「それじゃね、萃くん」

水稀以外の3人が3様に挨拶を済ませ、水稀だけが別の事を口にする。

「萃君、明日は『晴れそう？』」

「そうだな、明日は雨っぽいから『洗濯』はしない方がいいかもしれないね」

「そう、ありがとう」

水稀は、それじゃまた明日、と言ってほほ笑んだ。

そんな夕暮れの放課後の教室から萃は出て行った。

「何？ 2人はそう言う関係なの？」

「そうよ、水稀。さっきの会話は怪しいわよ」

そう言って3人が水稀をからかい、それに水稀はそれらしく対応していく。

そうこうしている内に話は近くのアイスクリーム屋の話になった。

「水稀たしかチョコミント好きだったよね？」

「うん、アイスはチョコミントしか食べたくない」

「じゃあ、あそこのアイス食べに行こうよ。ミント嫌いな私でも食

べれるくらいおいしいんだから」

「ああ、あの新しく出来た所？ 水稀行ったこと無かったっけ？」

「うん、行ってはみたいと思ってたんだけど」

「それじゃ決定。今から行こう。すぐ行こう」

萃が教室を出てから15分が経っていた。

「さて、それじゃ鍵誰がする？」

「頼まれたのは樹何だから、樹しなよ」

「げ、それはひどい」

「私たちは靴箱で待つとくから」

樹はしぶしぶ鍵を取りにいき、窓の力ギを締め始める。

その内に3人は教室を出て、靴箱に向かい始めた。

「まったく、あいつ等に友情はないのか」

窓のかぎを閉めながら、愚痴を垂れ流しす。

「まったく、やってられないよ」

窓の力ギは全て締め終わり、樹は鞆を手を取った。

「さーて、後は鍵をして、返すだけっ」と

「何ならその鍵、俺が返しといてやろうか？」

「あれ？ 委員長？」

出口には帰った筈の萃がいた。

「何なら、ではなく私たちが返しにくことになるんですけどね」

そしてその傍らには普段と雰囲気の違い水稀が立っていた。

「水稀？ あれ？ あんたら2人ってやっぱり」

「樹さん、今日皆さんでアイスの店に行く予定でしたが、あれは無しということ」

樹の言葉を遮るように喋る水稀。

「あー、越田 樹。何て言っていていいかなあ。まあ取りあえず、お前が持つてるモノは表沙汰に出来ない類の物なんだ。警察でも一部の人間しか存在を知らない様な、な」

「萃、それでは伝わりづらいかと」

「分かってるよ」

あー、と声を上げて髪をかく萃。

「2人とも何を言ってるの？ これ以上訳の分からない事を」

「樹さん、先ほど私に薬物を勧めましたね？ あれは普通の覚せい剤ではなく普通のものより更に手に入りづらい、都市伝説レベルの覚せい剤です。ご存知でしたか？」

感情の感じられない声と表情で水稀は淡々と告げる。

「私たちはそう言った表舞台にしまわった裏社会のモノを処理する組織の者です。そうですね、特に名前はありますがエージェントと呼ばれたりしますから……」

とたん、樹は荷物を水稀に投げつけ走り出す。

水稀はそれを受けるが、受け止めきれずに体勢を崩した。そしてその横を走り抜けようとするが。

「はい、ストップ」

体ごと萃に押さえこまれる。

「逃げたって事はクロだよなあ。これはアウトだろう。まったく、もう少しブラフで切り抜けようとか考えないものかね」

萃は、あー、と声を上げて髪をかく。

「いくらレアな覚せい剤を持ってると言っても、ただの女子高生にそれを期待するのは間違いですよ。」

所詮はただの女子高生ですから」

床から立ち上がりながら水稀は告げる。その間も樹は声を上げて抵抗を繰り返す。

「冷静に分析してないで、あれ早く打ってくれ」

「あれをですか？ 廃人決定ですが、大丈夫ですか？」

「どうせ『ヤクブツ』の所にもって行ったら自白剤だとかで廃人になるんだからいいよ。あいつも死んでなければ万事オッケー、とか言ってたし」

「……分かりました」

水稀はポケットから注射器を取り出す。指で後ろから押しだすタイプではなく、肌当てボタンを押すと6本の針が飛び出すタイ

ブの物だった。

「離せ！ 何だそれは！」

「さあ？ 薬剤の名前は俺らも聞かされてない。まあ、超強力な麻酔薬って所か」

「強いて俗称を付けるなら『廃人薬』とでもいいましょうか」

「やめろ、おい、お前ら正気か？！ おい？！ 聞いてんのかよ！」
会話からどういう薬かを察した樹は必死に抵抗するが、萃に押さえこまれた体はまったく動かなかった。

「それじゃ、ごきげんよう。樹さん」

ガシユツ、と言う音と共に中の液体が樹の体に入って行った。

「頼む、助けて……」

泣きながら助けを求める樹。しかし2分もすると涎を垂れ流し、呂律は回らなくなり、白目をむき、奇声を上げ始めた。

3分後には意識を失い、完全に落ちた。

「さてと、これで仕事は終了だな」

「それでは、私は鍵を返してきますので、事後処理をお願いします」
「了解」

萃は携帯を取り出し、樹の体を取りに来るように連絡を取った。

「お、そうだ。おい、水稀」

「なんです？ 私もする事があって忙しいのですが」

怒った風ではなく、あくまで無感情に事実だけを告げる水稀。

「好きだ、今度デートしよう」

「命令が下れば、いずれ」

水稀は鍵を持って職員室へと歩いて行く。

萃と水稀（後書き）

後から読み返してみると酷いw w

一応、頑張つて連載していきたいと考えております。

もう心が折れそうだけどw w

詩を詠う獣（前書き）

久しぶりの投稿です。お前書く気あんのか？！

とつつこんでくれる人がいたら歓迎します。

そして、ありますと答えます。

つつこみは歓迎だけど、あらしは勘弁ですけどねww

書くの下手だけど、そこにつこんだら負けと言つことずーつつww

詩を詠う獣

:

私は死を願う天子

それゆえに、誰とも共存できない

私は生を願う人間

だから、誰とも共存できない

私は全を願う神

ゆへに、誰とも共存しない

私は無を願う悪魔

よって、誰とも共存しない

私は願わざる者

なので、何者でもない

:

「なんでだー！ これは決まりごとだっただろう?!」

朝6時、萃の声が近所迷惑を考えずに響いた。

「萃、ココの朝食に決まりごとはなかったはずですよ」

「そうそう、決まり事なんてない。水稀の言うとおりだ」

水稀の意見に同調するようにほほ笑む小鳩「こばと」。

黒色でコーディネートされたせいか、その男のほほ笑みは悪魔を連想させた。

「ウチでは暗黙の了解だったじゃないか！ どうして、どうしてパンじゃなくて白い白いお米が食卓に並んでるんだ」

「そりやお前」

「私が、朝はご飯派だからだよ」

小鳩の言葉を遮りながら少女が、台所から現れた。

台所から帰って来た少女は、見る人が見れば天使とでも形容しそうな笑みを浮かべてくる。

高校生にしては小柄な体型と蒼と緋のオッドアイも相まって、一部の層の人間が見たら気が触れるんじゃないだろうかとさえ心配になる。

「……来てたのかよ」

「はい、萃が寝静まった時間ですから昨日の12時頃こちらに到着しました。小鳩から『説明は萃から聞いとけよ』と指示を貰いましたので説明の方をよろしくお願いします」

はあ、と萃は溜息をつき食卓に座る。

「ええ、小鳩さあん。萃君の主観が入った紹介なんてだめだめだよ。私自分で自己紹介しますねえ」

「いやいや、自己紹介ほど主観の入り混じった紹介もないだろうに。そもそも主観がまじらな」

「黙って飯食つとけ」

もう一度、萃は溜息をつく。

「……名前は綺堂丸 是葉」きどまる このは」。主に薬学を中心に治療、物資供給を担当するエンジニアだ」

「お、以外にまともな紹介ですねえ」

萃の紹介に嬉しそうに是葉は顔をほころばせる。

「性格は……」

「どうしました？ 萃」

萃は語りをやめ、箸を啜って考え込む。

「余計な事は言わなくていいですよ、萃君？」

「……そうだな、余計なことは言わない方がいいな。是葉の事はこ

れから自分で知っていくと良い

で、是葉。こいつが四蝶院「しちょういん」 水稀。お前は大体自分で調べてるだろ？」

しばしの間をおいて、考え込むように発言する萃。

「え、ええ、まあ」

萃の言葉に、水稀は困惑の色を、是葉は満足そうな顔を、そして小鳩はその悪魔の様な笑みを浮かべた。

「さて、取りあえずこれで全員が全員の事を知った訳だ。よろしくは後でしておけよ」

そう言った小鳩はポケットから取り出した封筒を全員に配った。

「もちろん是葉に来てもらったのは遊びの為じゃない。仕事の為だ。あ、水稀。その封筒の中身は是葉のいない所で確認しろよ。絶対に是葉に見せないように」

「わかりました」

「今回の仕事は殺人事件の犯人探し、及び確保だ。殺すなよ、お前ら」

小鳩は悪戯っぽく笑って見せる。

「殺人ねえ。どうせまた、まともな殺人犯じゃないんだろ？」

「そうだな、殺人現場の写真も封筒に入れてあるから目を通しておいてくれ

簡単に言つと、『詩を詠う獣』うたをうたうけもの』と言つのが今回の殺人犯のイメージか」

「詩を詠う獣？」

萃は是葉を見るが、是葉は首を横に振る。自分も分からない、と言つことだ。

「相変わらず要領を得ない話し方だな、小鳩。全然簡単じゃないぞ」
「ん？ ああ、要するに死体がまるで獣か何かに食いちぎられたかの様な殺され方で、殺人現場には詩が残されていた。

だから『詩を詠う獣』」

小鳩はドヤ顔を一同に向ける。

「……是葉、学校までの道まだ分からないだろう？ そろそろ出ようか」

「うん、そうだねえ。それじゃ鞆持ってくるよ」

「水稀も、学校行くぞ」

「はい、分かりました」

小鳩を除く3名は席を立ち家を後にした。

満足感たっぷりの顔で朝食を食べ続ける小鳩を家に残して。

「なあなあ、3組に転校生来てるらしいぜ」

「へえ、男？ 女？」

「女の子でさ、すごい可愛いらしいぜ」

是葉の事は一時間目には萃と水稀のクラスにも伝わっていた。

「なんか転校生来てるらしいよ。次の時間見に行ってみようか、水稀」

「えー、だって女の子でしょ。うーん、どうしようかなあ」

「男だったらよかったのに」

「美穂が期待してるのは小学生くらいの男の子で、男じゃないですよ」

あはははは、と水稀の所属するグループから笑い声が聞こえてくる。

「……目立ち過ぎだ、馬鹿が……」

そんな笑い声を先生に注される水稀を心配しながら、萃は呟くのだった。

喜一（前書き）

更新頻度は月一くらいになってる

別にかまわないですけどねww

喜一

晴れ渡るとはとも言えない、灰色の空の下体育の授業に励む小鳩を水稀は見下ろしていた。

（雨でも降りだしそうですね）

同居中の仲間を心配してのことではもちろんなく、ただ単に外の風景からの客観的判断である。

水稀がそんな事を考えていると、授業の終りを告げるチャイムが鳴り響く。

「それでは、ココまでとする」

教師のそんなセリフから始まる一連の流れ、水稀にとっては自分にスイッチを入れる儀式が始まった。

『おつかれさまでしたあ』

クラス全員の声が揃い、昼休みが始まる。

「ようやく四時間終わったねえ」

クラスメイトが水稀に声をかけ前の席に腰掛けた。

スイッチは入った、これからはこの高校の一生徒である。私は普通の女子高校生だ。

水稀の無意識下でその暗示は掛けられる。

「終わったねえ、でもどうせ半分も理解してないけどねえ」

「あははは、わたしもお」

昼休みになり、一人二人と仲間内で水稀の元に集まる。

「そう言えば聞いた？ ニュースにこそなっていないけど、今この町で出回ってる薬物の売人の話」

「なにそれ？」

「うん、それがね」

話の内容は、町に出入りする怪しいコートの男の話だった。

男の身長は160cm程度でやせ形。ニット帽とマフラーで顔を隠しており、薄いオレンジのグラスをかけている。

少し息が荒く、顧客は最初の一度しかその男には会えず、二回目以降は電話で売買をする制度らしい。

「何それ、ホントにいるのそんな奴？」

「いる訳ないじゃん、どうせ噂だよ」

周りに合わせて水稀が笑う。そして頭の中でメモを取り、もっと詳しいことも聞いてみようと考ええる。

「でもね」

クラスメイトは質問をする前に続きを話始める。

「何でも樹がその売人の顧客だったって話もあるんだよ」

「え？ 樹が？」

「うん、樹麻薬だっておちやらけてなんかサプリメントかなんか服用してたでしょ？」

あれが本当に麻薬で、お金払わず麻薬を奪ったから殺されたって噂になってるんだよ」

その話は半分だけあっていた。ただし、殺したのは水稀たちの組織で売人ではない。

「ええ？！ それこそ噂でしょ」

「ううん、樹って結局行方不明扱いでしょ？」

それにいろいろ細々した部分でも辻褄が合うんだって」

クラスメイトはその細々した部分を説明し始める。

（……これはひょっとするかもしれないね。一応今回の仕事の片手間に調べてみますか）

一度しか会えない売人など、樹に自白させた内容と合致する部分もあり、少しだけ無視できない内容となっていた。

「四蝶院さん」

教室の入り口から水稀を呼ぶ声がする。

「あ、ごめん。私今日当番だから、行くね」

「頑張つてね。水稀」

水稀は小走りでクラスを後にした。

「まあ、呼んどいて言うのもなんだけど別に図書室の当番なんて一人でもできるんだけどね」

水稀の隣で喜一は語る。

「ウチの学校で本を借りに来る生徒なんて全然いないからねえ」

喜一は割と大きな声で話しているが、それを咎める先生すらこの図書館には居なかった。

「まあ事実を言ってるだけだとは思っけど、あまり好意的とは思えない方だね」

「まあ根暗な生徒だからねえ、僕は。こうして二人きりならともかく、みんなの中にいるときはほとんどお喋りをしないからさ。」

好意的な話し方なんて見につけてないのさ」

「まあ、根暗なのは事実かな。いつも教室で詩集ばかり読んでいれば、友達も出来ない訳だよ」

「あれあれ？　なんだか敵意を感じる言い方だなあ」

「普通の女子高生なら、根暗な嫌われ者と図書当番なんてしたらこうなるからね」

「そう言わないでもいいだろうに、根暗って事はメンタル面は弱いんだよ？」

喜一は明らかに水稀に喧嘩を売る調子で言葉を紡ぐ。しかもそれを自覚しない形で。

このままでは意図せずして口げんかにでも発展しそうだと悟った水稀は口を開かず沈黙を作る

「ん？　何か落ちたよ、四蝶院さん」

「え？」

喜一が拾い上げたのは、先日貰った事件の資料の一部だった。

「ああ、それね。そうだ、その詩誰の詩分かる？」

殺害現場に血文字で書かれていた詩、それは出所不明の詩だった。

「えーと、

『私は死を願う天子……』」

「知らないならいいよ」

期待して聞いた訳ではない。ただいつもの情報収集の癖が出てしまったただけだ。

「うん、知ってるよ」

「え？」

完全に予想外の発言。しかし、予想外の発言は更に続いた。

「これは僕が書いた詩だね。誰に教えてもらったの？」

喜一は自作の詩の書かれたノートを開き、ほら、とノートの中の一部を指差した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2830y/>

エモーション

2012年1月14日19時50分発行